

榎野川河口域・干潟自然再生協議会 ニュースレター

発行日：平成 20 年 2 月
事務局：榎野川河口域・干潟自然再生協議会

< アマモ場造成、検討・実証事業の取り組み >

アマモ場造成、検討・実証事業は、平成 14 年度から、漁業者や地域の皆様等との協働により取り組んでいます。平成 19 年度も引き続き、地域住民のみならずと協働実施により、アマモ場再生を進め、干潟の生産力向上に努め、6 月 16 日にアマモの報告会と現地での花枝採取を実施し、採取した花枝からアマモの種子を回収しました。



その後、回収されたアマモの種は、水産研究センターで保管し、11 月にガーゼ等にくるんで船上から投入する投げ込みパック法、コロイダルシリカと混ぜる方法、シートにアマモの種を取り付けて海底に設置する方法等で播種（種植）を行いました。本年度に実施したモニタリング調査により、昨年播種したアマモは順調に生育していました。

また、榎野川漁協では、干潟保全の一環として、ナルトビエイの駆除を行っており、播種作業後に、山口県漁協山口支店、榎野川漁協の協力でナルトビエイの煮付け、ブラックバスの唐揚げ等が振る舞われました。



< カブトガニワーキンググループの取り組み >

山口湾のカブトガニ産卵場、生息場の保全を図るため、カブトガニワーキンググループ（原田直宏グループリーダー）の取り組みが実施されています。

平成 19 年度は、8 月 26 日に 42 名で、カブトガニ幼生の生息状況を把握するため「ラインセンサス法」を用いた調査を、18 年度に引き続き行いました。

その結果、長浜では 442 個体、南潟では 17 個体が確認され、南潟では昨年度と比較して個体数が少ない結果でしたが、全体の量を予測する上での個体数の分布概要を把握することができました。今後ともカブトガニを保全していくため、データを蓄積していく予定です。



このニュースレターは、榎野川河口域・干潟自然再生協議会で話し合った内容や自然再生の取り組みの状況などをお知らせするものです。平成 19 年度の取り組み状況は以下のとおりです。

実施日		内容
4 月	17、19 日	拡大実証試験のモニタリング（春季：中潟、南潟） 干潟モニタリング（南潟）：目視調査（毎月実施） 以下同じ
5 月	19 日	干潟耕耘実証試験（耕耘、被覆網） 干潟観察会（南潟）
6 月	16 日	榎野川河口域・干潟自然再生協議会（第 1 回：通算 8 回）
	16 日	アマモ観察会（報告会、花枝採取）
7 月	3、31 日	拡大実証試験のモニタリング（夏季：中潟、南潟）
8 月	26 日	カブトガニ幼生生息調査（自然再生協議会：カブトガニワーキンググループ）
10 月	11、18 日	拡大実証試験のモニタリング（秋季：中潟、南潟）
	13 日	干潟耕耘実証試験（耕耘） 干潟観察会（南潟）
11 月	26 日	アマモ観察会（報告会、播種作業）
	28 日	干潟再生小委員会（第 1 回）
12 月	17、25 日	拡大実証試験のモニタリング（冬季：中潟、南潟）
3 月	12 日	干潟再生小委員会（第 2 回）、豊かな流域づくり推進委員会（第 1 回） 予定

平成 19 年度に開催されました自然再生協議会の概要について紹介します。

< 第 8 回自然再生協議会の概要：平成 19 年 6 月 16 日 >

「榎野川河口域・干潟自然再生協議会」の第 8 回目の委員会を 6 月 16 日（日）、山口県水産研究センター内海研究部で開催しました。当日の参加者数は 36 名（構成委員 60 名）でした。会議では、平成 18 年度の事業報告（中潟、南潟拡大実証試験のモニタリング経過、干潟再生に向けた今後の方向、アマモ場造成の進め方）について、説明、質疑等が行われました。

なお、平成 18 年度に取りまとめた榎野川干潟再生の今後の方向は、以下のとおりです。



中潟における干潟再生の今後の方向

中潟の干潟再生に向けては、良質な砂を覆砂する工法で検討を進めます。なお、事業化にあたっては、良質な砂が他の公共事業などで確保されることが必要になりますので、当面は、必要最小限のモニタリングを行いながら、効果を検証していくとともに、良質な砂が確保された場合に、速やかに対応できるように準備をしていく予定です。

南潟における干潟再生の今後の方向

南潟の干潟再生に向けては、地域住民参加型の干潟再生を目指し、創意工夫しながら事業及びモニタリングを実施し、その成果を踏まえ順応的に事業を進めていく予定です。



< 干潟再生拡大実証試験場所 >

資料の公開方法
協議会で公開された資料及び議事要旨等については、榎野川河口域・干潟自然再生協議会のホームページ（<http://eco.pref.yamaguchi.lg.jp/fushino/index.html>）で公開しています。
ご意見・ご質問等の問い合わせは、事務局（山口県環境生活部自然保護課）に電話、FAX、メールでご連絡ください。
TEL 083-933-3060、FAX 083-933-3069、E-mail a15600@pref.yamaguchi.lg.jp

< 19年度の榎野川干潟再生の取り組みとその状況 >

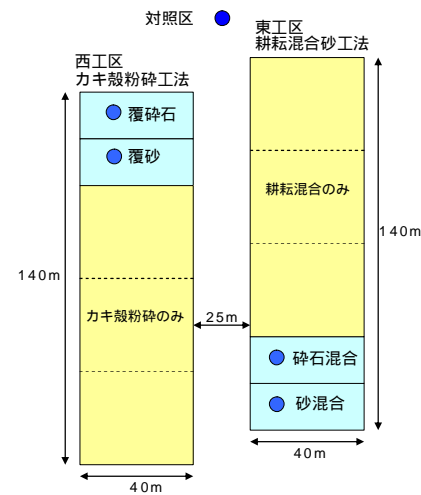
榎野川における良好な河口干潟生態系の生物指標の代表的なものはアサリやカブトガニ、アマモ場であり、これらの生息・生育環境の再生を目指すため、平成19年度は、中潟では拡大実証試験区のモニタリングを継続して実施、南潟では平成18年度の成果を踏まえ、地域住民参加型の干潟再生へ向けての実証試験及びモニタリングを実施しました。

【中潟での取り組み】

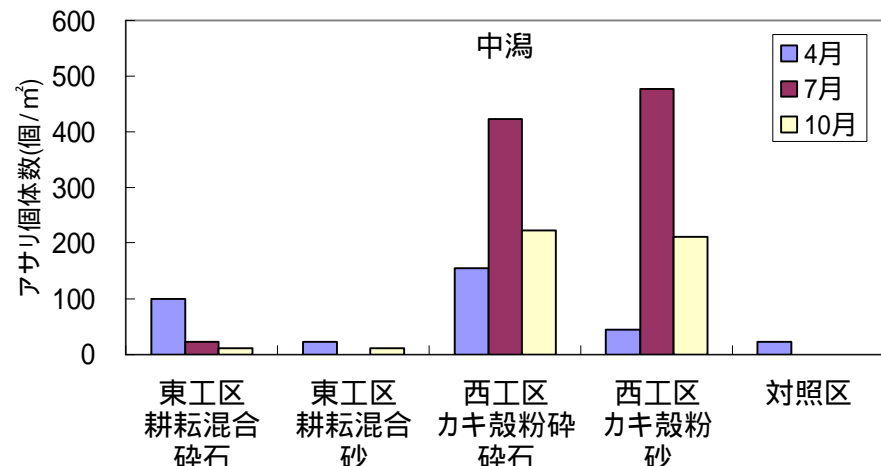
平成18年度結果より、各工法ともに砕石や砂を混合、覆砂することによって、低い泥分が維持され、生物の多様化、アサリ等の砂浜生物の着底が確認されました。平成19年度は、平成18年度に成果が顕著にみられた各施工区の砂や砕石を混合又は覆砂した試験区でモニタリングを実施しました(右下図参照)。今回は、施工後から約2年間が経過した平成19年10月までのモニタリング結果を示します。

< 中潟モニタリング結果の概要 >

項目	結果の概要
底質(泥分)	カキ殻粉碎工法(西工区)の覆砕石区、覆砂区では、施工後2年が経過しても、二枚貝等の砂浜生物に適した泥分を維持していました。
底生生物	上記の泥分の低い試験区では、対照区と比較して、昨年同様に軟体動物の二枚貝類の出現が多い傾向を示しています。 また、同試験区では、4月にアサリの稚貝が確認され、7月には20mm以上に成長したものがみられましたが、10月にはやや個体数が減少しました。 これらの原因については、ナルトビエイやカニ等による食害や波浪影響等も要因の一つと考えられるため、12月に同試験区で被覆網を設置しました。



平成19年度モニタリング測点()



< 試験区別のアサリの個体数変化 / 施工約2年後 >



< 西工区 砕石区 / 施工約2年後 >

【南潟での取り組み】

実証試験の概要

平成19年度は、平成18年度の成果を踏まえ、うね平行の耕耘を実施し、併せてナルトビエイ等の食害生物からアサリを保護するため、被覆網を設置しました。

< 平成19年度 南潟での干潟耕耘内容 >

作業項目	作業内容	規模	季節	回数
干潟耕耘	うね(平行)耕耘	90m x 25m	春	2回/年
		90m x 50m	秋	
被覆網の設置	耕耘区、対照区に被覆網を設置	10m x 10m	春	1回/年



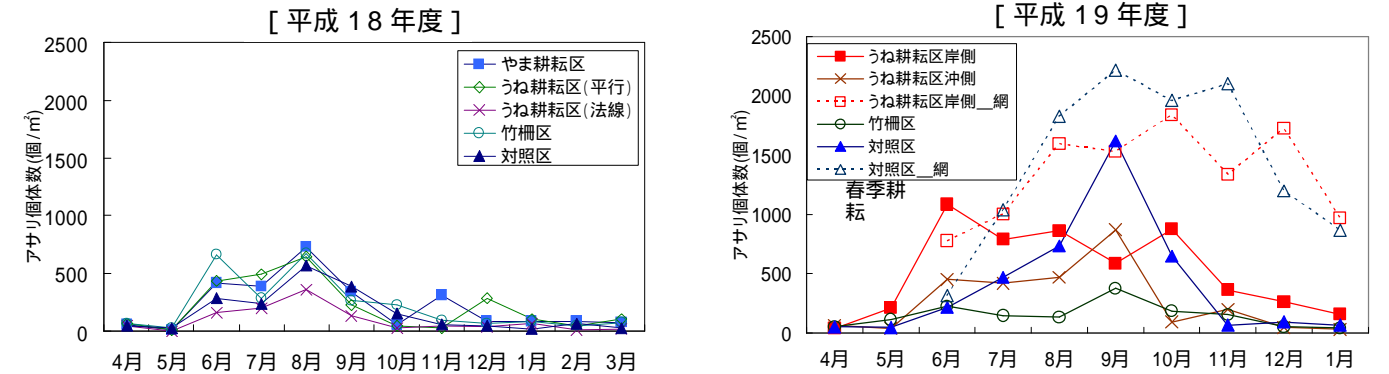
平成19年度の実証試験には、春に約120名、秋に約80名の参加がありました。また、5月、10月の耕耘実証試験の後に干潟観察会が実施され、10月には、地元の干潟生物に詳しい八坂小学校の杉村先生にも参加して頂きました。



モニタリング結果の概要

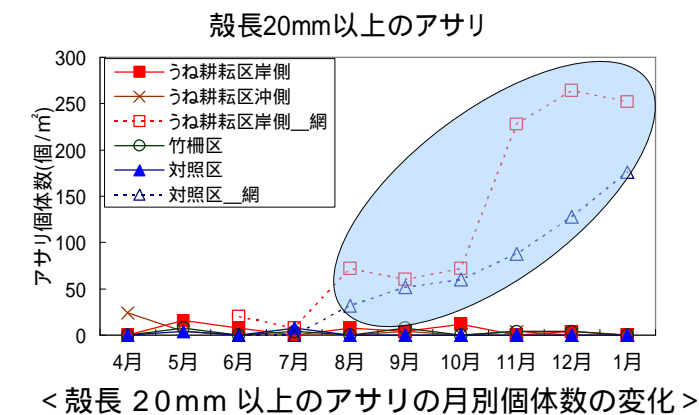
試験区のアサリは、平成17年度及び18年度と同様に5月頃から増え始めました。その後、10月以降にやや減少傾向はみられましたが、例年に比べ全般的にアサリの個体数は多い傾向にありました。

特に、被覆網を設置した試験区(右図の)では、被覆網の無い試験区と比較して、大幅に個体数が多く、食害防止等の効果が顕著に確認されました。



< 年度別・試験区別のアサリ月別個体数の変化 / 左図: H18、右図: H19 >

また、アサリの個体数は、秋季以降に減少傾向にあるものの、殻長20mm以上のアサリは、被覆網を設置した試験区(下図の)で、増加傾向にあり成長がみられています。また、被覆網の設置場所では、耕耘後に被覆網を設置した試験区()の方で、殻長20mm以上のアサリがたくさん確認されました。近い将来には、榎野川河口干潟で獲れるアサリの味噌汁が食べられるよう環境が回復していくことも期待されます。



< 殻長20mm以上のアサリの月別個体数の変化 >

